2024年
（令和6年）
2月15日

むつび

石井十次の会　会報

317号

４年ぶりにお会いして

淑徳大学長谷川仏教文化研究所

菊池義昭

４年ぶりに第２３回石井十次セミナーが開催され、「石井十次の会」の皆様などにお会いでき、大変嬉しく思いました。

毎月『ゆうあい通信』や『むつび』などを拝見し、福島県に住んでいてもいつも身近に感じてはおりましたが、やはり実際にお会いすると、少し懐かしい思いにもなりました。

ただし、同時に『ゆうあい通信』や『むつび』などを通していろいろな情報を共有しているので、実際にお会いすると４年間の長いタイムラグはあっという間に解消されました。その意味では、『ゆうあい通信』や『むつび』などが、時間と空間を超えて読者を繋ぐツールとして非常に重要であることを実感しました。

特に、８月の『むつび』第３１１号に「新たなスタートに向けて！」と題して「石井十次の会」宮崎支部が発足したとの記事が目に止まりました。同支部は、宮崎市・綾町・国富町在住の「石井十次の会」の会員で構成され、「まず何事もやってみる！」というチャレンジ精神で、「みなさんと知恵や経験、アイデアを大切にチームワークで取り組む」という主旨に共感しました。

そして、翌第３１２号には『宮崎支部通信』第１号が同封され、ハワイアン・ダンスとゴスペルのコラボレーション！」を開催するとの記事があり、早速チャ

レンジ精神を具体化していると驚きました。

そして、最近、岡山市の「石井十次に学ぶ会」より『十次通信』第２０号（２０２３年１２月１日発行）が届きました。その通信によりますと、昨年の福祉交流プラザ山南の「石井十次資料コーナー」や百花プラザでの「石井十次展」の資料を併せて新たに旧大宮幼稚園に「石井十次資料室」を開設したとの記事がありました。こちらも、毎年一歩一歩活動が深化し、たゆまぬチャレンジ精神にあふれていると感服しております。

「石井十次の会」も「石井十次に学ぶ会」も、全くのボランティア団体であり両会に集う皆様の自主的でありながらも主体的な行動のみが財産であり、その財産の根源にはチャレンジ精神が内在していると理解できました。

実は、石井十次も岡山孤児院の実践を具体化する際に、今自分ができることから一歩一歩地味ではあるが、積極的に取り組み、その結果、現在の時点で振り返ってみれば歴史的に重要な活動であったとの評価がなされるようになったと判断できます。

つまり、石井十次が岡山孤児院を創立した時代は、彼の活動に共感する者は少なかったが、孤児たちの悲惨な生活を何とかして改善したい。そのためには、まず自らが行動を起こす必要があり、行動を起こさずして単にこの問題を嘆いたり評論したりしても、何の解決にもならない。このようなチャレンジ精神を自覚し実践し、その後もこのチャレンジ精神が原点となり、歴史に残る実践が具体化したと理解できたからです。

ローマは一日にして成らず、継続は力なり、という言葉を胸に秘めつつ、常に前向きなチャレンジ精神で生きていきたいと考えております。

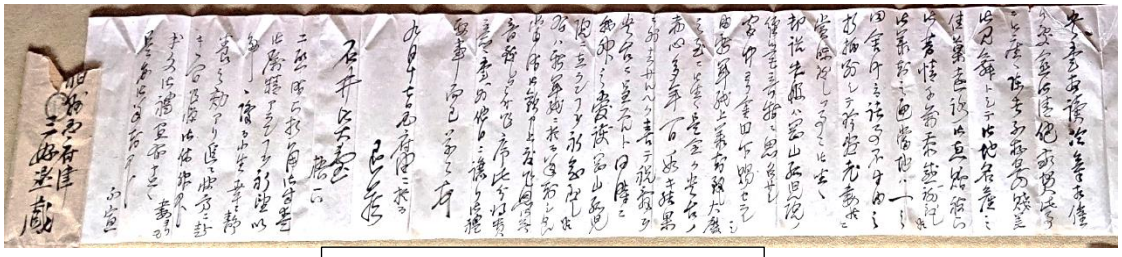
三好退蔵（その１）―石井十次を支えた先人たち（9）―

三好退蔵

三好退蔵は、弘化２年（1845）に高鍋城下の筏地区に生まれた。石井十次より 20 歳年長である。高鍋藩の藩校・明倫堂に学んだあと、江戸に遊学し安井息軒の三計塾に学ぶ。高鍋藩の大目付に抜擢され、用人に任用された。明治２年に維新政府に出仕し、司法省に入った。裁判所の判事を歴任するかたわら、憲法調査のため海外派遣や海外滞在も経験した。明治 23 年に検事総長、明治 24 年に大審院長（現在の最高裁長官）に就任した。彼の中央での活躍は、旧高鍋藩の後輩たちの目標となった。彼も後輩たちの面倒をよくみた。石井十次が明治 32 年に上京したとき、三好退蔵の世話になった。年の離れた先輩であったが親しく交際し、三好も十次をよく支援した。

１．三好退蔵の書簡

石井十次資料館に、三好退蔵が石井十次に出した書簡が展示されている。三好の書簡は高鍋では貴重である。三好は大審院長を明治 29 年に退官し、民間の弁護士として活躍する。体調を損なって神奈川県国府津の自宅で静養していた明治 39 年（推定）９月 17 日に十次に出したのがこの書簡である。十次が病気見舞いのために、菓子を贈ったことにたいする丁重な謝礼である。十次が皇室から下賜金をもらったことに祝意を表するとともに、「手紙に書けない内容については、他日論じましょう」と書かれている。手紙に書けない内容とは何かは憶測するしかない。十次が三好と親しく交際した目的は、当時は存在しなかった「福祉に関する法律の制定」を目指していたのではないかと考えられる。三好は法曹界の最高位にあった。福祉を立法化するには最適の人物である。しかし、社会福祉の概念はまだない時代である。そのような社会で福祉の立法化は至難の業である。三好としても熟慮してかからなければならなかったに違いない。不幸にして、三好は明治 41 年８月に病没する。福祉の立法化という十次の望みは実現しなかったのである。



石井十次資料館にある三好退蔵の書簡

２．高鍋の三異材

幕末から明治維新にかけて、高鍋藩の青年のなかで、日本の将来の棟梁となる人物が三人いるといわれていた。鈴木来助、水筑弦太郎、三好退蔵の三人である。鈴木来助が一番年長で、和漢洋の学をおさめ、英気最もすぐれ、安井息軒が激賞した人物であったが、戊辰戦争に従軍し、27 歳で戦死した。水筑弦太郎はそれより２歳若く、慶応３年江戸薩摩藩邸焼き打ち事件の後、薩摩屋敷の脇田市郎を救おうとして、25 歳で亡くなった。

それより１歳若いのが三好退蔵である。24 歳で高鍋藩の大目付（警察署長の役）に任命された。明治新政府に入ったのは明治２年で、はじめ行政官だったがその後司法省に入り、司法官としてのキャリアを歩み始める。

３．三好退蔵の生い立ち

三好退蔵は、高鍋藩士・田村質勝の三男として生まれた。兄・義勝が田村家を継ぐ。三男・退蔵は三好家の養子となった。三好家は上杉鷹山に訓言を呈し名家老といわれた三好善太夫を生んだ家系である。義勝・退蔵の兄弟は幼少から優秀だった。藩校・明倫堂を出ると兄弟そろって江戸に遊学し、安井息軒の三計塾に学んだ。兄・義勝は三計塾の塾頭になった。廃藩置県後は、二人とも新政府に出仕したが、義勝は健康を害して高鍋に帰った。藩校・明倫堂は明治６年に閉校した。若者の中等教育の場がないことを憂慮して、義勝は明治 11 年に私塾・晩翠学舎を興す。翌 12 年には文部省令に基づく私立中学校・高鍋学校（後に公立）を興す。明治 18 年に高鍋学校は晩翠学舎を吸収し、漢学部とした。晩翠学舎と高鍋学校は、ともに藩校・明倫堂の学風を継続する学校として知られ、高鍋と近隣の若者の勉学の場となった。石井十次と柿原正一は晩翠学舎で学んだ。

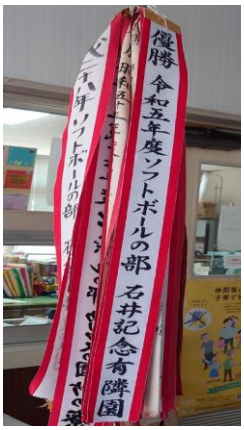
弟の退蔵は、三計塾を出ると、高鍋藩の若手の幹部として登用されたが、明治２年には明治新政府に出仕し、中央での道を歩みはじめた。　（以下、次号）

（参考資料　高鍋町教育委員会「高鍋の先賢」）　（編集委員　石川正樹）

石井記念友愛社の福祉施設を訪ねて②～石井記念　有隣園～

「仁愛の家」の全景

都城市の南西部、西に高千穂の峰を望む児童養護施設「石井記念有隣園」は、昭和３２年１月に開設されて６７年の歴史があります。「有隣園」の名称は、論語「徳は孤ならず。必ず鄰（となり）あり（徳不孤、必有鄰）」に由来し、その意味は、在園生に理解できるように園長が話されているそうです。乳児院「仁愛の家（定員１０名）」（左写真）が隣接しており、３歳になると有隣園へ移ってくる子もいます。園の敷地には「のぞみ寮（女子中高生）」「おおとり寮（男子中高生）」「つぼみ寮（小学生）」「めばえ寮（幼児）」の四棟あり、現在３８名の子どもが生活しています。寮の他に、子ども達がキャッチボールをしたり走り回ったりする運動場や旬の野菜を栽培するみんなで耕した畑もあります。玄関には、令和５年度児童養護施設対抗球技大会ソフトボールの部で獲得した優勝旗が飾ってあります。廊下や壁面には、宮城園長が描かれた絵画や様々な賞状などが掲示してあります。園の行事「ゆーりん祭」で職員や石井十次の会都城支部の方々とフォークダンスを踊ったり、「クリスマス会」で職員全員が楽器演奏を発表したり、「卒園生を送る会」では合唱の伴奏を職員自ら携わったりと、職員が温かく子ども達を支え指導していることが伝わってきます。優勝旗は、常に子ども達に寄り添う職員と目標に向かって生きていこうとする子ども達とが手にした誇りだと感じました。



（編集委員　西村さと子）

方舟館からのお知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】飯野　圭一

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【西都市】三井　京子

寒い日はお家で・・・

方舟館の外観や、石井十次資料館・研修館の中の様子がスマートフォンで見られます。右のQRコードを読み取らせてください。「カメラ」をかざして表示されたmap.appで始まる横文字をクリックしてもOK

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

㊦ 884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会
石井十次の会　TEL/FAX 0983-32-4612
メール yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

★編集後記

「むつび」巻頭に、十次セミナー講師の菊池義昭先生より玉稿をいただき、ありがとうございました。今後も「チャレンジ精神」をもって編集活動を続けたいと実感しました。

（編集委員　西村さと子）